秋の収蔵資料展「池袋ヤミ市と戦後の復興」について

豊島区立郷土資料館　横山恵美

一　「池袋ヤミ市」の常設展について

当館では、一九八四年の開館以来、戦後池袋の復興を象徴する「池袋ヤミ市」を常設展のテーマに掲げてきた。開館当初から注目を集めたのが、池袋駅東口に東京で最初に建設された木造長屋式連鎖商店街「森田組東口マーケット」を、縮尺二〇分一で再現した精巧な模型である。当時このヤミ市には二八一軒の店があり、半数強が飲食店であったが、再現した南側部分（一〇三軒）には食料品や日用品、衣料品など多様な業種の店が集まり、活気あふれるヤミ市の雰囲気を表現している。

実は、開館準備の常設展のテーマを決める検討段階で問題となったのが「ヤミ市」であった。犯罪がらみで暗いイメージである等の批判的意見が出されたが、ヤミ市にみられるエネルギーが戦後復興の原点となったことを評価し、結局とりあげることになった。模型製作に際しては、星野朗氏が行った連鎖商店街の実態調査報告に基づき、ヤミ市全盛期の一九四七年夏を想定して店の業種を定め、立教大学松平誠教授らによる聞き取り等の実態調査は店の造作や店内の様子の再現に活かされた。また人の雑踏がないと街のエネルギーや賑わいが表現できないことから二百人余りの人物を配置し、真夏の昼下がりから夕刻にかけての太陽光の変化を照明で演出することで、臨場感あふれるリアルな模型が完成した。すでに戦後四〇年近くが経過し、ヤミ市の細部を忠実に再現するには多くの課題や困難に直面したが、関係者の努力と多くの方々の協力によりヤミ市模型

が実現したのである[1]。

この展示の意義は、松平氏が指摘するように、これまで「敗戦の「恥部」のひとつとしてとらえられ」、「戦後の混乱した社会生活を反映する反秩序の無法地帯」、「暗く汚れたイメージと結びつく」存在であった闇市を、「日本経済発展の活力の源泉」であり、「権力的な意味での「公正」「公共」「公定」に対立する庶民の実生活が生き生きと実現される場」、「積極的で明るい存在」としてヤミ市を再評価したことであろう[2]。歴史的評価の定まらない戦後史を常設展で取り上げる公立博物館が少なかった当時、「ヤミ市」の再評価を試みた展示は画期的であったといえる。

今回の「戦後池袋」プロジェクトの目玉展示の一つが、このヤミ市模型であった。見学者からは「ヤミ市再現の模型が素晴らしい。当時の人々の話し声、息づかいが伝わってくるかのようだ」(四〇代)、「建物の細かいディティールや商売の様子もよくわかった」(五〇代)など好評で、開館後三一年を経てもなお、ヤミ市模型の魅力は変わらないことを再確認する機会となった。

二　収蔵資料展のねらいと内容

メイン会場の東京芸術劇場では、ヤミ市時代の世相や文化を、写真やスケッチ、カストリ雑誌や映像を通して総合的に紹介する内容であったことから、当館では、寄贈された戦中・戦後の生活資料を中心に展示を構成し、約八〇点の遺された「モノ」を通してヤミ市時代の区民のくらしを見つめなおすことに主眼を置いた。あわせてヤミ市撤去後の池袋の街の変遷を約四〇点の写真でたどることにした。

①焼け跡からの復興　なぜヤミ市が生れたのか、その前提となるアジア太平洋戦争は多くの犠牲者を出して日本の敗戦で終わったが、このコーナーでは、一一回に及ぶ空襲で一面焼け野原となった区内の様子を米軍撮影の空中写真等で紹介し、戦争の悲惨さと脅威を再確認する導入展示とした。当時、罹災者や引揚者がヤミ市に住み込んで商売を始めるケースが多かったといわれるが、展示では罹災証明書を通して、区内で三度の空襲に遭い焼け出された夫婦が、戦後池袋駅東口のヤミ市で電気店を開き、さらに西口にも出店した事例を紹介した。

②戦後のくらしとヤミ市　池袋ヤミ市が当時としてはかなり計画的に建設され、短期間で大規模に成長した要因と、多種多様な業種が集まっていたことを、空中写真とヤミ市分布図、業種別グラフ、ヤミ値と基準価格の比較表、関連年表を通してわかりやすく図解した。あわせてヤミ市

の看板と半纏、買出し用のリュックサックと弁当箱、ヤミ市で買ったアルミ鍋と草履など関連資料を展示した。

また池袋モンパルナスの画家の作品も特別出品した。高山良策の「池袋駅東口」は、戦後二年目のヤミ市全盛期の解放感溢れる池袋駅東口の光景を生き生きと描写する。一方、鶴田吾郎の「池袋への道」は、敗戦から半年後の要町のアトリエ近くから池袋駅西口に広がる焼け野原をリュックサックを担いで歩く人々の姿を描く。戦後の食糧難と物資不足のなか、ヤミ市の買出しで命をつなぐ人々の苦悩と疲労感が伝わってくる。戦後の明と暗を象徴する注目すべき二作品といえる。【写真上】

③戦後のくらし―統制・配給時代の生活資料―　戦後も深刻な住宅難・食糧難と激しいインフレが続き、人々は農村への買出しやヤミ市に頼らざるを得ない窮乏生活が続いたが、その実情を寄贈資料から見つめなおしてみた。具体的には、当時生きるために不可欠だった食料・衣類・生活用品・燃料などの様々な配給切符や米穀通帳、預金封鎖関係資料、再生品の特集記事が載った婦人雑誌のほか、戦後不要となった軍需物資のジュラルミン（航空機体材料）を使ったパン焼き器・お盆・ちりとり・かんざし、落下傘の紐で組んだ羽織紐や帯締めなどを展示した。また空襲で焼けた木材で作った張板と桐の木で作った火鉢に込められた被災者の想いや、苦労して入手したミシンでトンビ（男物和装用コート）を女性用オーバーに再製した戦後の洋裁ブームを反映したエピソードなども紹介した。【写真下】

④写真でたどる戦後池袋　(1)ヤミ市撤去と駅前整備（東口）、(2)ヤミ市撤去と駅前整備（西口）、(3)池袋東西交通問題、(4)デパートラッシュと屋上遊園地という４つのテーマを設け、ヤミ市撤去と東西の民衆駅（駅ビル）を核とした駅前整備の様子、そして一九五八年に副都心に指定された

池袋の変貌を写真を通して考えていくこととした。写真の選定過程でヤミ市の貴重な写真が数点確認され、「火災保険特殊地図」（都市整図社）を使って撮影場所を特定することができた。また、昭和三〇年代後半以降の池袋の変遷を記録した写真は、これまで区民等から当館に多数提供されており、今回の展示でも関心を集め、「昔懐かしい写真が多くあった」（六〇代）などの声が寄せられた。

今回展示した戦中・戦後の代用品や転用品は、統制の撤廃により生活物資が自由に変えるようになるとヤミ市とともにやがて姿を消し、人々の記憶から忘れ去れていく運命にある。ヤミ市世代にとっては戦後の苦労と懐かしさを感じるものであっても、戦争を知らない世代には単なる使い古された道具にしか見えないであろう。しかし、これらの資料は、戦後四〇年から七〇年近く捨てずに家で大切に遺されてきたものであり、博物館に保管して平和の大切さを伝えてほしいと託した人々の想いが、その一つ一つに込められているのである。また寄贈者からの聞き取りで得られた「モノ」にまつわる情報やエピソードは、戦後のくらしを伝える貴重な記憶であり、記録である。戦中・戦後の資料は粗悪な材質が多く年々劣化が進み、その保存対策は急務となっている。寄贈者の想いとともに、失われつつある「時代の証言者」である資料を永く後世に伝えていくことが、郷土資料館の使命であり責務であると考えている。

三　展示を終えて

今回のプロジェクト会期中の来館者は、九日間で一、〇三七名、秋の収蔵資料展（一一月二九日まで、延べ六二日間）では四、六一九名と通常の収蔵資料展と比べて多くの来館者を迎えることができた。地域ぐるみのイベントの宣伝効果と六会場を巡る回遊展の相乗効果によるものであろう。見学者のアンケートをみると、「もう少し展示が多いとよい」（五〇代）、「当時のくらしぶりが良くわかった」（四〇代）、「思ったより充実した内容でよかった。戦後ヤミ市企画の他の展示と合せて観ることでより理解が深まった」（五〇代）、「他区のものとは趣を異にしており、特色があって良い」（五〇代）、「狭いながらも歯ごたえのある展示おもしろかった。いつも郷土資料館からは独自の気骨とアイデンティティーを感じる」（二〇代）など概ね好評をいただいた。また若い世代の見学者も多く、「池袋の歴史を知ることで、今の池袋のこともっと知りたいと思った」（二〇代）、「西口・東口での微妙な栄え方、ヤミ市の廃れ方の違いがよくわかった」（一〇代）など、池袋の戦後史に興味を

もつ機会となったようである。

一方、ヤミ市世代からは、「戦いの悲しみを思い出し、むごさを伝えることは大切だ、良い企画だと思う」（六〇代）、「終戦時の展示資料はなつかしく拝見した。すべて使ったことがある。これからも収集を続けて下さい。他に思い出したもの、鉄カブトで作った鍋、手作りのタバコ巻器…」（八〇代）、「大変興味と感慨深く見学した。私の母が提供した、洋裁習いたての母が有り金で作ったオーバーが展示してあるのを眺めて当時を改めて振り返り、想いを新たにした。池袋西口ヤミ市等感慨深く拝見した。これから後の世代にも継承したい」（八〇代）など、自身の人生と重ねて懐かしく思い出す人が多かった。単に「懐かしさ」で終わらせるのではなく、戦後七〇年を振り返り、改めて戦争と平和について考える機会を提供したいとの思いで展示を企画したのであるが、果たしてどれほどの効果があっただろうか。見学者の声を今後の展示にどう活かし、次の世代に繋いでいくか、郷土資料館の役割は重いと感じている。

最後に、戦後池袋とヤミ市を検証する今回のプロジェクトを終えて、当館に関していえば、これまでヤミ市の常設展示に依存し、ヤミ市の調査研究を進めてこなかったという反省と課題が残った。当時のヤミ市を知る世代は年々減少し、ヤミ市の実態調査はますます困難となっている。現在当館は大規模改修工事のため休館中であるが、二〇一七年一〇月予定のリニューアルオープンに向けて、関連資料や写真の収集を進めるとともに、戦後生活史や都市史などの最新の研究成果を取り入れながら、地域の視点に立った新たな「戦後池袋」像を提示できればと考えている。

【注】

1　山辺昌彦「郷土資料館の開館準備過程について」、村山健「豊島区立郷土資料館における復元模型の製作」を参照（豊島区立郷土資料館研究紀要『生活と文化』第一号、一九八五年所収）。

2　星野朗・松平誠「池袋『やみ市』の実態―第二次世界大戦後の戦災復興マーケット―」立教大学社会学部研究紀要『応用社会学研究』第二五集、一九八四年。

【謝辞】「戦後池袋」プロジェクトに参加する機会を与えていただいた関係者の皆様に改めて御礼を申し上げます。なお当館の展示は①～③を筆者が担当し、④を秋山伸一が担当したが、学芸スタッフ全員が協力して作り上げたものである。寄贈者・提供者・協力者の皆様に心より感謝申し上げます。

（豊島区立郷土資料館学芸員）